

幻になった壮大なイベント —野外オペラ「アイダ」

Unaccomplished Huge Event —Aida, an Outdoor Opera

堀上 謙

HORIGAMI Ken

十月十七～十九日の三日間、東京ドームで上演される予定だったイタリア・ベローナ歌劇場公演のオペラ「アイダ」(読売新聞社、オペラアイダ実行委員会主催)が中止になりオペラファンを落胆させた。ベルディーのオペラというと、リゴレット、椿姫、ドン・カルロ、オテロ、マクベスなどが有名だが、もっともポピュラーで上演回数が多いのが「アイダ」である。

この作品は、一八六九年スエズ運河の開通を祝って、エジプトの首都カイロに建設された劇場の、開場記念の上演台本として作曲されたもの。ベローナの「アイダ」はベルディーの生誕100年を記念して一九一三年に上演され、以来毎年夏にローマの旧跡カラカラ大浴場跡の野外劇場で「ベローナ・オペラフェスティバル」として行なわれている。圧巻の第二幕・第二場〈凱旋の場〉には、800人の演者が登場するほか、四頭の馬に引かせた戦車が数台走り回るという、スペクタクルなもの。こうした視覚的な要素が、ベルディーの音楽以上にこのオペラを支え、グランドオペラの華といわれている理由でもある。今回の公演は、そこまでの規模ではないらしいが、生誕200年を記念しての引越し公演そして東京ドームを使っての上演だけに大掛りな舞台が予測されていた。当然、額縁舞台やホールでのオペラ公演とは演出の規模が違う筈である。映画監督としても知られるフランコ・ゼフィレツリが演出、ベローナ劇場の常任指揮者ダニエル・オーレンが指揮をするほか、キャストも人気歌手が予定されていたというだけに、大いに期待されていた。それが突然の公演中止の報である。

主催者の発表によると、切符の売れ行きが不振で取り止めになったというが、S席7万円というのはいかにも高額すぎるような気がしていた。しかし、このオペラの壮大な内容、そして出演者の膨大な人員からして、仕込みの費用も大変な額になるのは予想されていた。それだけに、切符の完売が前提だったことは理解できるのだが、いまほとんどの興行が集客に苦戦している時代である。相当な費用と宣伝が必要だったことも確かであろう。ところで40年前(1973年)、この野外オペラ「アイダ」を、すべて日本人のみのスタッフ・キャストや出演者だけで上演しようという企画が進められたことがあった。鬼才といわれ、多彩な顔をもつ武智鉄二の企画・総監督で、代々木の国立競技場を使ってのナイトショーとして立案されたのである。武智氏は、当時「オペラを額縁舞台から解放された野外円形劇場で演出することは、私のような演劇人にとって、本懐とするところ」と意志をもらしていたのである。煩雑を厭わずその豪華な企画内容を次に記してみよう。

スタッフ＝〈演出〉武智鉄二〈演出助手〉観世栄夫ほか〈振付〉坂東三津五郎〈演奏〉東フイル〈指揮〉小沢征嗣〈合唱指揮〉堤俊作〈美術・装置〉勅使河原蒼風〈照明〉今井直次など。
キャスト＝〈アイダ〉山口和子、〈アムネリス〉砂原美智子、〈ラダメス〉丹羽勝海、〈アモナスロ〉栗林義信、〈ランフィス〉大橋国一など、当時の超一流アーティストを起用するほか、〈僧・武士・巫女・侍女・民衆・捕虜・バレエを踊る女〉など登場人物約500人は、芸大、音大、バレエ団、舞踊団、新劇関係グループから出演者を登用。馬30頭と騎乗者は、大学馬術クラブに出場を依頼。動物＝象・ラクダ・山羊各2頭とその他小動物は、木下サーカスから借りるというスケールの壮大な案だったのだ。

この企画、正式には公表されなかったが、ひそかに出演交渉やスポンサー探しを始めたのだが、制作を担当した私の力不足があつて残念ながら実現することができなかった。因みに当日の入場料は、A2千円、B千円、C5百円の予定であつた。一万人の観客を集めるということがこの企画案の前提で、たくさんの観客に楽しんでもらうというのが武智氏のコンセプトであつた。幻に終わった企画なので、武智氏の業績や伝記には記録されていないが、もしこの壮大な企画が実現していたら、日本人による野外オペラの歴史と武智氏の演出家としての功績に大きな足跡を残していたに違いないだろう。ペローナ歌劇場の来日公演の中止にかさねて、その無念を改めて思い出すのである。

(元能楽ジャーナル編集長)